

## 「賛美の喜び」

詩篇 150 篇 1-6 節

森島 牧人 牧師

今日は1月の第五主日です。私たちの教会では、第五主日は「讚美礼拝」をささげることになっています。教会の主日礼拝に於いて「賛美」は、大きな位置を占めています。何故なら、主の日とは<主イエスの復活を記念する日>であり、死と滅びから解放された私たちが、主と共に生きる者として交わり、それを祝い合う晴れやかな喜びの時だからです。心から賛美することによってその喜びを祝う、それが神の国の宴である礼拝なのです。

さて、私たちプロテスタントの教会は、幕末から明治初期の頃に外国の宣教師によって建てられたのですが、その当時教会は<講義所>と呼ばれ、賛美よりも聖書の講義を聞くのが中心となっていました。それは今でも続いていて、教会の礼拝でも、キリスト教系の学校の礼拝でも、聖書を読みそれを理解することに重点が置かれ、賛美は言わば刺身の妻・端のような存在になっています。しかし礼拝の本来の在り様は、復活の主を見て弟子たちが喜び賛美した姿にあり、出席者一同で復活の主の勝利を喜び、神を賛美するというダイナミックな場面であるはずだと思われるのです。

また礼拝は、「二人または三人がわたしの名によって集まる時、そこにわたしもいる。」との主の約束の通り、主イエスと私たちとの交わりの時であり場所です。その神との交わりの時であり場所である礼拝には二つのパートがあって、その一つは神から私たちへの「語りかけ」です。先ず神からの招きの言葉、すなわち私たちが主の導きに与ることへのゆるしがあり、聖書の朗読、説教、ある場合には聖餐、派遣と続き、祝祷をもって終わる、これが神からの語りかけの部分です。もう一つは私たちの「応答」の部分で、私たちの祈り、信仰告白、賛美、献げものがそれに当たります。神の語りかけに対しての私たちの応答と、この二つが一つになって礼拝は成立します。二つの部分が組み合わされ交差することによって、対話としてのリズムが生まれるのです。

さらに重要なことは、神との交わりが「言葉」をもって行われているということです。神が語りかけ、それを聞いて私たち人間が答えて行く。それに対しまた、神が言葉を語り、またそれに私たちが会衆として応答して行く。互いに語り合い、応答して行く、それが礼拝です。この中で、神と人間の人格的な交わりである「神礼拝」が行われるのです。

礼拝の中で大きな位置を占めている賛美ですが、それはまた、神からの語りかけをもって行われるものです。礼拝は神との交わりですが、この場合は、神と私との一対一の交わりではなく、隣人、兄弟姉妹と共に横に広く繋がって行く交わりの中で、共に祈り、讚美し、時として共に重荷を負い合うという、そういった中での<神との交わり>なのです。従って礼拝に於ける賛美は、個人的なものではなく、共同体としての賛美で、基本的には会衆としてささげる賛美ということになります。

礼拝では、小さな子供から老人までが一つになって賛美をささげます。そのためには、みんなが理解出来る、共通の言葉による賛美でなければなりません。求められるのは、キリスト教に触れたことのない方々にも分かる言葉での賛美です。誰もが分かる<共通の言葉>で主イエスを、神を讚美することが出来る、これこそが私たちの喜びとなるのです。

これからも、喜びをもって神を賛美して行く私たちがでありたいと願っています。

(説教要約 羽入田悦子)